学術随想

三途の河——西と東

●連載

加藤九祚

巷間の歌の文句に「男と女の間には深くて暗い河がある」というのがある。意味ありげな文言（もんごん）ではあるが、とくに内容はないと思う。あるとしても、本質的に言って、人間の各個人間にある隔り以上のものではないだろう。

ところが、現世と来世の間に河のような水域があるとの観念は随分古くからあったようだ。仏教に言う「三途の河」の観念がいつ成立したか明らかにし得ないが、いずれにせよ相当古いものであろう。『模範仏教辞典』（大文館書店刊）には次のように解説されている。「人の死後、未だ次の生を受けない前に、死出の山を越えて後、渡るべき河だという。みつ瀬川、渡り河、葬頭河とも書く」。

死者が死後に渡るべき水界があるとの観念は、実は仏教の成立以前から広くみられた。古代エジプトでは、死亡したファラオは水界とされる天空を渡ると考えられ、第四王朝（前二五〇〇年頃）の遺跡から、死者とともに埋めこまれた舟が発見されている。舟の模型が埋葬の一部として見つかっている例もある。シュメルやバビロニアでは、来世の地は水にとりまかれていると考えられた。シュメルの神話「エンリルとニンリル」に来世の河とそれを渡す人のことが書かれている。前十一世紀の『バビロニア神義論』には次のような句があるという。

われらの父たちは死の道を去りゆく、
古えに言うフブルの河を渡る。

河を渡るには渡し賃が必要である。死者の口中や手に金貨を持たせる風習はギリシアから西アジア、中央アジアに広まっている。ゾロアスター教でも、死者が死後に渡るべき流れがあると考えられた。その聖典『アヴェスター』によれば、死者の霊は、査問と裁判の行なわれるチンワトの橋のたもとに送りこまれる。裁判では死者が生前になした善行と悪行が秤（はかり）にかけられるが、これを行なうのは、秤を手にしたシシュヌー神で、このほかミトラ、スローシュ、善良なワイ、ワフラム、アシュタトラが立ち会っている。橋そのものが秤の結果に応じて、刃先ほどのせまい幅になったり、槍二十七本の広さになったりする。生前に善行をなした人の霊は広い橋を安全に渡り、対岸のたもとで待つ美しい天女と二匹の犬に案内されて、光の園である楽園に導かれる。罪人の方は、刃先のようにせまい橋を渡ることができずに、地獄に落ちてしまう。

チンワトの橋はどこにかかっているのか。それは生者の世界と死者の世界を分ける「深くて暗い河」にかかっている。この河の水は、身近な者の死を嘆く生者の涙によって満たされているという。これまで死者の数は数え切れないほどあったわけだから、涙が集まって河となって流れていても不思議ではない。

このほか、インド最古の聖典『リグ・ヴェーダ』にも、来世への途上に大きな河のあることが書かれている。考古学者リトヴィンスキーは、こうした河の観念が、インド人とイラン人が分化する以前のインド・イラン人のものであり、さらにその母体であるインド・ヨーロッパ語族にさかのぼる可能性があると考えている。

死者が来世におもむく途中、河など水域を渡るとの観念は、人類に共通のものかも知れない。シベリアの一部の民族にもあったし、日本にもあったかも知れない。例えば、古墳時代のいわゆる装飾古墳にしばしば舟の絵が描かれている。死者が生前に渡ってきた海を示すものか、それとも、死者の霊がこれから渡るべき水域を示すのか。福岡県浮羽郡吉井町富永にある珍敷塚（めずらしづか）古墳の「鳥船の彩画」はとりわけすばらしい壁面に赤い絵具で、前方に帆をあげた小舟が描かれ、そのへさきには鳥がとまっている。舟の上には櫂を手にした人物が乗っている。この人物は死者ではないだろうか。また、沖縄の人たちが言う「にらいかない」（海のかなたにある聖地）も、水域と関連している。いずれにしても、「三途の河」の観念は、なかなか深くて広い全人類的な根をもっているように思われる。

（かとう きゅうぞう・創価大学教授）